

「太陽になろうとした男」

河内レオン

「一一九番消防です。火事ですか？救急ですか？」

「火事、火事だよ」

「何が燃えていますか？」

「えーっとね、何が燃えてるのかってのはここからじや分かんないんだけど、今しがた外でボーンって爆発音のようなものが聞こえたもんでき、窓の外を覗いたら桜木町二丁目の送電線の鉄塔の上で火の手が上がつてんだよ」

「鉄塔の上？鉄塔の上に炎が見えるということでしょうか？」

「そう、鉄塔の先端近く。とにかく、何かが燃えてるってのは間違えねえから、消防車を遣してよ」

とうに陽は沈んだというのに失せることのないねつとりとした熱気が宙に漂い、誰もがその不快さに苛まれていたその夜、地区の消防司令センターには同じような通報の電話が相次いでいたが、不思議なことにどの通報の声にもさしたる緊迫感は無かつた。なぜなら、その火事というのは、高さ四十八メートルの鉄塔の上部で仄かな炎が揺らめいているだけのものだつたからである。

武骨な鉄筋を組み上げた巨大な姿を都会の街中でさらしているにもかかわらず、見上されることがなければ誰も気に留めることさえない送電線の巨大な鉄塔。下界を静かに見下ろすかのように高くそびえるその鉄塔の上で一瞬だけ強く舞い上がつたその炎は、暫くの間ゆらゆらと微かな光を放ちながら地上を照らしていたが、消防隊が到着する頃には暗闇の中で今にも消えそうな小さな焰となつていた。

「あそこの煤けている所、見えます？あの辺りで何かが燃えてたんすよ」

サイレンと警鐘のけたたましい音と共に現場へ駆けつけた大型の消防車から飛び降りた消防士に、灰色の鉄塔の下に集まつて騒然としていた近所の住人の一人がそう言つて塔の上を指差すと、闇夜に浮かび上がるだけの何の変哲もない鉄塔を見上げた消防士たちは一様に拍子抜けした様子だつた。

ところが、鉄塔下の人だかりは逆に増えていく一方で、数分後、消防同様に現場へ急行して来た電力会社の社員が送電線の断線や漏電のないことを見極めると、隊長より鎮火の確認を命じられた登はん技術を持つ消防の兼任救助隊員が、愚民たちの好奇な視線を浴びながら命綱を手に淡々とした調子で鉄塔を登り始めた。

「送電線が切れた訳でもないのなら、いつたい何から火が出てたんだろう？何者かが悪戯で市販の花火でも打ち上げたのだとしても、あの高さまでは届かんだろうしな……」

鉄塔の上の出火原因をそんなふうに不審に思いながら慣れた足取りで瞬く間に塔の上部へと登つて行つたベテランの隊員は、火元に近づくにつれ、事態が悪戯でも何でもないことに直ぐ気付いた。幾度となく火災現場で嗅いできた不快な臭気。生身の肉体や髪の毛が焼けるあの吐き気を催す匂いが漂ってきたのだ。そして、嫌な予感を抱きながら鉄塔の最上部、四〇メートル近くまで登つた隊員の視界に飛び込んできたもの、それは紛れもなく人の焼死体であった。鋼鉄の鎖で鉄塔に身体を巻き付け、太い鉄筋にまたがつた姿のままで黒焦げになつた屍。焼けただれた肌の隙間から露出した赤黒い筋肉の流れるような線はまるでムンクの絵画の筆触のようで、その形相は顰の能面の如く近寄る者を威嚇しているようさえ見えた。

「嘘だろ？」

これまで幾度となく火事場で惨状を目にしてきた経験豊かな隊員でさえ想像だにしなかつたそのおぞましい屍。それをして一瞬顔色を変えた隊員は生睡をごくりと飲み込んだ後、恐怖を振り払うかのように「よつしや、行くぞ」と自ら大声を発して気合を入れ直すと、目を背けたくなるような黒い塊にゆっくりと接近して燃る火の粉を手で払つた。

「こりやあ酷い」

思わずそう呟いた隊員が見たところでは、その焼死体はがっしりとした体格から判断して男性に違ひなく、鉄塔の上まで自らでよじ登つたのだとすれば、自殺の可能性が高かつた。男が鎖で身体を鉄塔に巻きつけている理由は、熱さに耐えきれず自ら鉄塔から飛び降りてしまうことを防ぐ為だったのではないかと隊員は推測したが、そこまでして鉄塔の上という奇妙な場所で、しかも投身自殺ではなく焼身自殺することにこだわつたのかが解せなかつた。

「いつそのこと、飛び降りてしまった方が苦しまずには済んだだろうに。どうしてわざわざこんなことを」

そう呟いて小刻みに痙攣する臉に抗うように大きく目を見開いた隊員は骸に向かつて手を合わせると、スマッグに覆われた月さえ霞む夜空の下でぼつりぼつりと星のように輝く住宅街の灯りとまるで蜜に群がる蟻のように見える野次馬たちを鉄塔の上からそつと見下ろしながら無線機に手をかけた。

「北1から、北1隊長、どうぞ」

「隊長、どうぞ」

「キユウマル、一名発見」

程なくして、消防からの通報を受けた川崎北警察署の鑑識課員も到着。殺人や放火といった事件性の有無も含めた現場検証を慣れない高所で肅々と行つた鑑識課員の見立ては、ほぼ焼身自殺で間違いないというものであつたが、検視官は送電線の鉄塔の上という現場の特異性から念の為、司法解剖の許可を裁判所に申請。神奈川県警からの応援要請を受けてやつて来た東京消防庁の四〇メートル級はしご車によつて鉄塔から下ろされた黒焦げの遺体は直ぐさま東都医科大学の法医学教室に運び込まれ、司法解剖が行われた。

遺体に刺創等は無く、その胸から臍部にかけての表層に溶けた多量のポリアミド繊維とポリエチレンテレフタレートが付着していたことから、解剖を担当した法医学者は死亡した男がペットボトルに入れたガソリンを全身に浴びた後、残りのガソリンが入つたボトルをナイロン製の背嚢に入れ、意図的に抱きかかえて自殺を図つたと判断。男が死に至つた原因については、熱傷により身体から急激に水分が流失したことで引き起こされた脱水症状に起因する衰弱死であるとの死体検案書を作成した。法医学者からの報告は、鉄塔にようじ登つた男が自らの身体を鉄塔の柱に鉄製の鎖を使って固定。ペットボトルに入れたガソリンの一部を浴びて火を点け自殺を図り、燃え上がつた火がやがてペットボトル内で気化したガソリンに引火した際、爆発を起こしたとしたという所轄署の鑑識課による分析結果とも一致。現場に遺書の類は残されていなかつたものの、鉄塔の上で起こつた奇妙な事件をガソリンを使用した焼身自殺であつたと断定した神奈川県警は、電力会社の送電設備に被害を与えたとして容疑者死亡のまま器物損壊罪で書類送検する方針を固めた。

とは言え、死因が自殺と特定はされたものの、焼けた死体が四十歳から五十歳程度の中年男性ということ以外は身元さえ判明せず、鉄塔の上という不可解な場所を選んだ理由や自殺の動機もまったくもつて不明のままであつたのだが、鉄塔上の焼身自殺事件から三日後、鉄塔にほど近い住宅街に建つ築五十年の古い木造アパートで異臭騒ぎが発生したことで事件は意外な展開を見せた。部屋の住人が自殺でも図つて死んでいるのではないかと心配したアパートの大家が部屋の中に入るのを躊躇して警察に通報、駆け付けた警察官が室内に足を踏み入れてみると、そこにあつたのは撲殺された血塗れの別の男性の遺体で、しかも、その部屋で暮らしていた住人こそが、鉄塔の上で焼け死んだ身元不明の男だつたのである。

\*

男が鉄塔の上で自らの身体に火を放つた時から遡ること六時間前、弱々しい排気音を漏らす廃車寸前の原付スクーターにまたがった灰色の作業着姿の片桐敏夫が自宅のアパートへちょうど帰ってきたところであった。失業中の彼が訪れていた先が地区の公共職業安定所であつたのは、失業保険の僅かな金を手にする為には四週に一度、失業認定と呼ばれる手続きを所に出向いてしないといけないからだ。そして、この日は給付金の支給打ち切りという無慈悲な宣告を受けた彼の最後の失業認定日でもあつた。

「ご承知のとおり、長引く景気低迷により弊社の業績は回復の目処が立たず、この度、事業からの撤退を余儀なくされました。桜木工場に勤務されております従業員の方々には誠に申し訳ありませんが、全員解雇せざるを得なくなりましたので、ここにその旨予告致します」

そんな機械的な文言が綴られた、たつた一枚の紙切れで職を失つてからはや半年。契約社員として十年近くも黙々と単純作業をこなし続けてきた勤務先の工場閉鎖も晴天の霹靂だつたが、何よりも、暗澹たる世界へある日突然、裸同然で放り出されたことの方が片桐にとっては辛いことであつた。特にこれといった技能もないうえ、とうに四十を過ぎた真面目だけが取り柄の中年男にとって再就職は茨の道なのである。

公共職業安定所へ足繁く通つたからと言つて職を得られるでもなく、国家が失業者の為に仕事を探してくれる訳でも面倒を見ててくれる訳でもない。履歴書は書いても書いても応募先から送り返されてくるか無視されるだけ。アルバイトの求人でさえ、応募しても断られる始末だ。なのに、そんな苦労もしたことのない世間の凡人たちは「仕事なんて選ばなければいくらでもある」とのたまゝ、国民という名の下僕に課せられた勤労の義務という馬鹿らしい言葉だけが存在し続ける。何の責任も果たさぬ国家が押しつけてくる義務は「義務」ではなく「強制」以外の何物でもなく、義務という言葉がいつしか片桐の中で憎悪の対象となつていたのは自然なことであつたのかも知れない。

スクーターから力なく降り立つてヘルメットを脱いだ片桐は、首に巻いた手拭いで額の汗を拭うと玄関脇の郵便受けの中を覗いて数枚の封書を手に取つたが、それらに一瞥をくれて眉間に皺を寄せた彼がしたことは、封も切らずに封筒を直ぐさま両手で勢いよく引き裂き、ゴミ箱代わりのブリキのバケツの中に放り込むことだつた。役所から何度も同じ書類を送りつけられている片桐には、封筒の中身がどのみち破綻する国民年金の未納の保険料と住民税滞納に対する支払いの催促状であることが分かつていてからである。ただでさえ失業して収入も途絶え、貯金も底を突きかけているというのに頻繁に送られてくる催促

状。普段なら封筒の中の書類を隅から隅まで読んでは、早くなんとかしなければと気を揉むのが常だった彼の虫の居所がこの日は悪かつたという訳では決してない。この日は何かが違っていたのだ。

ぼさぼさの髪を搔きむしって玄関の鍵を開けた片桐がアパートの部屋に入つていつものように戸のスイッチに手を伸ばすと、直ぐに年代物のテレビの小さなブラウン管に人の姿が浮かび上がり、スピーカーからは同じく人の声が聞こえてきた。ただそれだけのことだが、なぜだか彼はいつも不思議な充足感に満たされる。それが、一人暮らしの彼がくだらない番組を垂れ流すテレビを点ける理由だった。ささくれの目立つ畳が敷かれた四畳半と六畳の間に響くテレビの音。扇風機と小さな卓袱台があるだけの殺風景な部屋。場末の旅館のようなその小さな世界が、気がつけば人生の折り返し地点を過ぎていた彼にとっての全てであつた。

安っぽいプラスチックの羽根が微かな風切り音を立てながらカビ臭い空気を煽る扇風機の前で片桐が立て膝をついて暫くの間、涼んでいると、玄関先でドアを軽く叩く音と聞き覚えのある男性の声が彼の鼓膜を刺激した。

「片桐さん、ちょっとといいかい」

声の主はアパートの向かい、通りの反対側に建つ瀟洒な一軒家で暮らしているアパートの大家だつた。朝見た時には無かつた片桐のスクーターがアパートの前に停まつているのを目にした大家は、今なら彼が部屋にいるだろうと踏んでやつて来たのだ。大家が訪ねて来た理由に心当たりのある片桐が憂鬱そうに玄関のドアを開けると、頭髪に白髪の混じる年配の大家は彼の姿を見るなり挨拶も抜きに言つた。

「片桐さんさあ、先々月から滞つてゐる家賃なんだけどね、そろそろ払つてもらえねえかな。こんなことはあんまり言いたくないんだけど、こつちも商売だから」

片桐が見こしていたとおり、大家が訪ねて来た目的は滞納しているアパートの家賃の催促だつた。

「迷惑かけてすみません。昨日、面接をしてもらつた会社でちょうど仕事が決まりそうなんで、来月にはなんとかできると思います。それまで、もうちょっとだけ待つてもらえませんか」

と片桐は申し訳なさそうに深々と頭を下がたが、面接の話はその場で思いついた作り話であつた。既に百社近くに履歴書を送つたが、書類選考でふるい落とされるばかりで、面接までたどり着いたことなど一度もないのだ。

「そうかい。そりやあ良かつたじやない。あんた、もう半年近くもぶらぶらしてゐるからさ、俺も心配してたんだよ。部屋で首でも吊られちやあ困るしね」

大家はそう言つて頬を緩めたが、直ぐに余計な一言を付け加えてしまつたことを取り繕うかのように「冗談だよ、冗談。じゃあ、来月、これまでの滞納分と併せて宜しく頼むね」と言つて片桐の肩をぽんぽんと軽く叩くとその場から去つて行つた。

「あの親爺は僕に仕事が見つかつたと聞いて喜んだのではなく、家賃回収の目処がついたことが嬉しかつたのだ」

そんなふうに思いながら大家の背中を見つめて玄関のドアをそつと閉じた片桐は、畳の上で仰向けに寝転がり、失業するまでは吸つていた煙草のヤニで飴色になつた薄汚い天井板を見つめながら溜息をついた。

「このままで電気やガス、水道までもが止められる日がやつて来るのも時間の問題だ。それどころか、アパートの部屋からも追い出されかねない……」

毎晩、目を閉じれば頭に浮かぶのは金の工面のことばかりで、金さえあればと考えれば考えるほどに、金の呪縛から逃れられなくなつていく。しかし、それでも尚、金を稼ぐのではなく他人から奪えれば良いという思いに片桐が至らないのは、彼が遵法精神に溢れた聖人君子だからではない。彼にとつてはそれこそが魂までを金に支配されることに抗う最後の砦だからだ。

「人は生きる為に金を稼がなくてはならない。が、金を稼がなくてはならないが故に人が生きているのなら本末転倒だ」

熱を帯びて肌にまとわりつく淀んだ空氣の中で片桐がぼんやりと時を過ごしていると、まるで消え入るような声で話しかけるかのように玄関のドアを弱々しく叩く音が再び聞こえてきた。

「今度は誰なんだよ……」

煩わしそうに立ち上がりつてドアを開けた片桐の視界に飛び込んできたのは、日傘を差した女性の二人組で、一人は黒髪に白いワンピース、もう一人は少し茶色に染めた髪に白のブラウスと膝下丈の黒のスカートを身にまとい、どこか清楚な雰囲気の漂う女たちだった。

「ここにちは。私たちは今日、神に遣わされてこの町へやつてまいりました」

目の前の男の值踏みを瞬時に終えた化粧氣のない黒髪の女の方が、微笑みながら口を開くと、片桐は表情も変えずに「そうなんだ。この暑い中、御苦労だね。でも、神に用はないから帰つてくれるかな」と丁寧な言葉遣いで直ぐに追い払いにかかつたが、神に遣わさ

れた彼女たちは簡単には引き下がらなかつた。

「少しだけでも私たちの話を聞いていただけませんか。あなたのそのお顔、私には今、あなたのお顔に不幸の相が見えたのです。何かお困りごとでもあるのではないですか？」

黒髪の女がそう捲し立てるに、その台詞を待つて立たかのように、彼女の隣で様子を見守つていた茶髪の女が加勢した。

「本当、不幸の相が見えるわ。もし何かに悩んでおられるのなら、私たちが開いている勉強会に参加してみませんこと。共に神の御前で祈りましょう」

女たちの目的が宗教の勧誘であることは明白で、片桐がそのことに気付かない訳はなかつたが、なぜだか彼はわざと物欲しげな表情を浮かべて「困つてることは山ほどあるけどね」と答えた。

「どのようなことでお困りかお聞かせいただけませんか？私たちに何かお手伝いできることがあるのではないかと思います」

見るからに真面目そうな片桐の姿が葱を背負つた鴨にしか見えなかつたのか、黒髪の女の言葉はさらに熱を帯び、片桐は思案するかのように少し首を傾げると、彼女のブラウスの胸元の膨らみを舐め回すように見つめながら答えた。

「そうだな、一番困つてるのは性欲の処理かな」

片桐のその言葉が女たちには予想もしなかつたものだつたのであろう。神から遣わされた二人は戸惑いながらお互ひの顔を見合させ、片桐は茶番劇を演じる彼女たちに卑猥な視線を向けながら真面目な顔をして誘つた。

「助けてくれるつてなら中へ入つてよ。3Pでもやつてみない？」

「あ、ありがとうございました。あなたに神の御加護がありますように」

黒髪の女は目を伏せながら慌ててそう言うと、連れの女の手を取つてくるりと片桐に背を向けた。

「ねえ、神に訊いといてよ。時給千円で僕を雇つてくれないかつて。いや、五百円でもいいからさ」

逃げるようす小走りで走り去る女たちの背中に大声を浴びせて二人を嘲つた片桐だが、彼は何か後味の悪さを感じていた。それは、彼女たちをろくでもない人間だと最初から決めつけて否定することは間違つてゐるのではないかという思いがふと脳裏を過つたからであつた。送られてきた履歴書の応募者の年齢を見ただけでろくに読みもせずに書類選考で落とすような連中たちと自分も同じではないかというような気がしたのである。し

かし、彼は直ぐさまその考えを打ち消した。

「いや、僕が彼女たちのことをどう思おうが、彼女たちは他人の家のドアを叩き続ける。僕が履歴書を書き続けるのと同じように。僕たちは受け入れてもらうことをただひたすら求めるしかない側の人間なのだ」と。

奇妙な女たちの姿の中に自己の分身を見たような気がした片桐は、部屋の押入れの前に立つて呼吸を整え、襖の引き手に手をかけた。彼は一瞬、迷つたかのようにその手を止めたが、結局、襖を開けて中の引き出しから真新しい履歴書の束を取り出した。それから、卓袱台の前で前屈みに座り、履歴書の上で黙々とペンを走らせ始めた。写経をする修行僧のようすに彼が何枚もの履歴書に同じ文字を一心不乱に書き写していると、やがて額から流れ落ちた汗の粒が書き終えたばかりの履歴書の上にぽたりぽたりと落ちて、ペンのインクの字を滲ませた。インクを滲ませた汗は彼の不注意から落ちたのか、それとも、落ちるべくして落ちたのか。片桐が何か虚しさを感じながらインクの滲んだ履歴書をくしやすくしやくに丸めただよどその時、またしても玄関先でドアを力強く叩く音が聞こえた。

「ごめんください。片桐さん、いらっしゃいますかあ？」

顔を顰めて立ち上がった片桐が玄関のドアを開けてみると、ドアの向こうに立つてていたのは、首から身分証のようなものをぶら下げたスーツ姿の三十歳前後の男だった。片桐は怪訝そうに男の顔に視線を向けると「なんのご用？」と不機嫌そうな声で言つた。

「私、M H K 地域スタッフの大橋と申します。本日はこの近辺のM H K の受信状況の調査をしておるのですが、片桐様宅でのM H K の受信状況は如何なものでしようか？」

そう言つて慇懃無礼に笑みを浮かべた男に生真面目な片桐は「M H Kなら、ちゃんと映つてるよ」と応じた。

「そうですか。M H K の番組もご覧になつておられるということですね」

男はそう言うと書類鞄の中から紙切れを取り出し、片桐の前にその紙片を差し出しながら話を続けた。

「ところで片桐様、片桐様はまだM H Kとの受信契約をされておられないようですね、本日は契約の方をお願いしたいと思います」

「契約？何の契約だい？契約の意味が分からんんだけど」

「我が国では放送法という法律によつてですね、テレビを設置した方には受信契約を結ぶ義務があるんです。受信契約をしていただき、受信料を毎月M H Kへお納めいただかなくてはなりません」

勝ち誇ったように話す前の男が所謂M H Kの集金人であることを理解した片桐は、意外な言葉を口にした。

「へえ、そうなの。もう少し詳しい説明を聞きたいな。上がつてくれる」

「勿論です。お邪魔します」

そう言つて男は靴を脱ぐと片桐の部屋にそそくさと上がり込んだが、男が片桐の淡々とした言葉の中に潜む何かに気付くことは全くなかった。むしろ、新規契約を獲得したも同然だと思つた男の表情は意気揚々としたものであつた。

「大橋君だつたつけ、そこに座つてよ」

と片桐は男に向かつて卓袱台の前に座るように促すと、押入の襖を開けながら訊いた。

「受信契約とやらを僕がどうしてしないといけないのか、もう一度教えてくれるかな」

「テレビをお持ちのあなたには受信契約をする義務があるからですよ。放送法でそう決められてるんです」

「義務？ それって義務じやなくつて強制だろ？」

「いえ、義務です。昭和二十五年に制定された放送法の第六十四条にそう記されていますよし、最高裁判所も義務であることを認めていますよ」

部屋の片隅に置かれた故障寸前のテレビに向かつて顎をしやくりながら話す男の言葉を聞き終えた片桐は、押入の中で眠つていた金属バットを手に取ると、男の方へと振り返つた。その金属バットは、昔、彼が会社の草野球のチームに加わっていた頃に使つていたもので、彼にも時を重ねた人生があることを証言する数少ない物言わぬ証人であつた。

「な、何ですか？」

眼光をぎらぎらと不気味に輝かせながらバットを手にした片桐の姿を目にした男は驚きの表情を浮かべたが、続けざまに「何するつもりだよ、あんた：」という言葉を発した彼のその表情が恐怖に変わることはなかつた。なぜなら、そうなる前に片桐が男の頭上めがけて力一杯バットを振り下ろしたからである。鶏肉の骨を碎くようになぶい音がしたかと思うと、男は声を上げる間もないまま畳の上に崩れるように横倒しとなつた。それは、まさしくほんの一瞬の出来事だつた。片桐は茹でた海老のように背を丸めたまま消え入りそうな声で呻く男の頭上に立つと、尚も男の顔面を何度も何度もバットで容赦なく殴りつけた。床と天井との間をバットが幾度となく往復し、畳表が男の血飛沫と頭部から流れ出す鮮血で赤く染まつてきた頃、ようやく片桐はその手を止めた。

片桐はまったく動かくなつた男の横腹を蹴り上げると、金属バットを片手にテレビの

前で胡坐をかいだ。呼気に乱れがある訳でもなく、顔色が変わっている訳でもなく、テレビの前で画面に見入る彼の様は、いつもと何も変わらぬ姿であった。浴びた血飛沫で斑模様になつたその顔以外は。

暫くの間、テレビが垂れ流す意味のない映像が映し出される画面を眺めていた片桐だったが、彼はおもむろに立ち上がり、足軽が長槍で敵を仕留めるかのようにテレビのブラウン管めがけて金属バットを突き刺した。割れたガラスの隙間からは薄らと白煙が舞い上がり、その屑箱に背を向けて台所へ向かった彼は、流しの前で水道の蛇口から勢いよく水を出して顔を洗つた。それから、薬缶を手に取つて水を注ぎ、鋸の浮いたガスコンロの火を点けたが、着火装置から弱々しく飛んだ火花がバーナーヘッドから噴き出すガスに引火した瞬間、片桐は目を大きく見開いた。コンロの上で青白い炎が菊花を描き、その立ち上つた炎に後光が差したような気がしたのだ。いや、彼には確かに見えたのである。それが闇を照らす希望の炎のように。

片桐は眩しそうに目を側め、彼の小さな世界を清らかに照らし出す炎を静かに見つめながら、薬缶を五徳の上に乗せて水が沸騰するのを待つた。やがて、薬缶の蓋がカタカタと揺れて尖つた注ぎ口から湯煙を立て始めると、片桐は棚に積み上げられたインスタントのカップ麺を手に取つて湯を注ぎ、卓袱台へと運んで傍らに転がる潰れた顔の男を平然と眺めながら麺をすすり始めた。麺を分け与えるはずの来客の息は既になく、カップ麺が来客をもてなすご馳走という訳でもなかつたが、彼にとつては最後の晩餐だつた。

「大橋君、君は憐れだな」

カップ麺のスープを一滴残らず飲み干して空腹を満たした片桐が血塗れで畳の上に横たわる無言の男に向かつてぼそつと呟いたのはそんな言葉だったが、それは、利用する側の人間に都合良く使われていただけだったのであろう男の末路を憐れんでいるのと同時に、あたかも自分自身に對して向かられているようでもあつた。

「よし、大橋君。今から裁判をしよう」

暫し腕組みをしたまま天井を仰いでいた片桐が突然、死人に向かつてそう声をかけたのは、彼には警察へ自首する気など端からなかつたからである。自首すること自体は一向に構わないが、その後に待ち受けている裁判で御用裁判官たちに裁かれることなどまつぶら御免だつたのだ。

「裁く者と裁かれる者との間に横たわる境界線は司法試験という紙つぺら一枚だけ。それなのに、神の審判の如く人を裁く己惚れた裁判官ども。他者を裁くことができる者は社会

で共に生きる市井の人々だけであって、それ以外に他はない。そして、ここにいるのは僕ひとりだ」

それが彼の結論であった。

人が人を裁くのでもなく、法が人を裁くのでもなく、罪を裁くものでさえもない一人裁判を始めた片桐が自らに問うたことはただひとつ。どうして自分が男を殺したのかではなく、どうして男が死ぬことになったのかだ。

「この男が愚かにも権力の手先となつて僕から金をむしり取ろうとやつて来たからなのか？なぜに死ぬことになったのはアパートの大家や神の遣いの女たちではなくこの男だったのだろう？」

卓袱台の下の籠の中に隠してあつた煙草とライターに手を伸ばし、紙箱の封を切つて煙草に火を点けた片桐は、半年振りの煙草をうまそうにふかしながら思案を続けたが、いくら考えてみても彼にはその明確な答を見出すことはできなかつた。いや、そもそも理由などなかつたのだ。履歴書の上に滴り落ちてインクを滲ませた汗のようだ。

すると今度は、畳の上に横たわる屍の方から「ふざけるな。いきなり訳もなく人を殺めるなんて正気じやないぞ。あんたは狂つた罪人だ」という声がしたような気が片桐にはした。

「罪人だつて？何の罪だい？君を殺したことが罪なのかい？僕が認めるのは、罪ではなく君を殴り殺したという事実だけだね。その事実は受け容れるよ。じやあ、逆に訊くがね、大橋君。いとも簡単に従業員の首を切ることは罪ではないのかい？収入を失つた文無しの人間から金をむしり取ることは罪ではないのかい？人の心につけ入ろうとするることは罪ではないのかい？履歴書を送り返さない連中と盗人との違いは何なんだい？法律に反しなければ何をやつてもいいのかい？罪つてのはいつたい何を意味するんだよ？教えてくれよ、大橋君」

向きになつた調子でそう言つて薄ら笑いを浮かべた片桐には、男を殺めたことへの改悛の念などまったくといつていいほどなかつたが、彼は狂人でも愚か者でもなかつた。

「何か言つてくれよ大橋君、言えないか？死んでるんだものな」

そう言つて立ち上がり死骸を見下ろした片桐は「仕様がない。じゃあ、僕の最終意見陳述を聞かせてやるよ。君の命を奪つたことに対する後悔の念はいささかもないが、僕はその対価を自ら支払わなければならない。それが僕なりの正義と公正だ。これにて結審」と話しかけると、暫し無言のままで天井を凝視した後、自らに言い聞かせるようにはつきり

とした声で言つた。

「主文。太陽となつて闇を照らせ」

狭く薄暗いアパートの部屋に響いたその判決は、贖う為のものではなく片桐の中に生まれて初めて芽生えた自らの意思であった。そして同時に彼は気付いた。二度と灯ることのないテレビの鎮座する部屋が、この世のものとは思えぬ静寂に支配されていることを。空気が消えて真空になつたかのような、耳鳴りがしそうなほどの静寂。彼が今までその静寂を感じることがなかつたのは、自らそれに距離を置いていたからなのだ。

心地良い静寂の中で穏やかな表情を浮かべて押入の前にそつと立ち、その中に手を伸ばした片桐が奥から引っ張り出したのは、真冬にしか使つたことのないポリ袋に包まれた灯油ポンプであつた。そのポンプは石油ストーブに灯油を給油する為に使つていたもので、片桐はポンプを小脇に抱えて玄関先に向かうと無造作に並べられていた空の大きなペットボトルを二本拾い上げ、アパートの前に停めてあるスクーターの前まで足を運んだ。

無風という状況下で酷い湿気が淀む部屋の外は蒸し風呂のように暑く、額から溢れだした玉粒の汗を作業着の袖で拭つた片桐がスクーターの燃料タンクのキャップを外すと、沸点を越え始めたガソリンの匂いが瞬く間に立ち上つた。

誰かに見られたら不審に思われるのではないかといつた俗人思考とは既に決別を告げていた片桐は、迷うことなく灯油ポンプの吸入口を燃料タンクに差し込み、片手でポンプを揉みしだきながら平然とペットボトルにガソリンを移した。見る見るうちにペットボトルは橙色のガソリンで満たされていき、片桐にはそれが工場で出来たばかりの真鍮の薬莢に包まれた砲弾のように輝いて見えた。彼はぎつしりと重くなつたペットボトルの蓋を固く締めると、赤子を抱き上げるかのように持ち上げて満足気に掌で撫でた。

「これで良し。上出来だ」

ガソリンの充填作業を終えて部屋へと戻り、水道の蛇口からコップに注いだ生温い水を一気に飲み干した片桐は、部屋の長押に打ち付けられた釘からぶら下がるくたびれたナイロン製のデイパックを手に取り、そのあと、昼食の弁当を入れるかのように危険な液体が満ちたボトルを無造作に詰め込んだ。その姿には何ら浮足立つたところもなく、囊からペットボトルの先端が顔を覗かせたままのデイパックを肩に背負い、長旅に出る旅人のように何かし忘れたことはないかと部屋の中をおもむろに見渡した彼が気になつたのは、なぜだか床に横たわる死体のことではなく、冷蔵庫の中に生ものを入れっぱなしにしていないかということであった。

僕約を心がけ、物を多く持つことのなかつた片桐には身辺整理をするようなものなど何もなかつたが、彼は冷蔵庫を開けて庫内に残つていたものやさつき食べ終えたばかりのカツブ麺の器を片つ端からゴミ袋に放り込んで袋の淵を固く結ぶと、最後にガスの元栓を閉めた。それから、畳の上に転がる男を一瞥し、玄関のドアに鍵をかけて部屋を後にした。まるで夜勤の職場へ向かうかのようだ。

人影の途絶えた通りへ片桐が出てみると、ドイツ製の高級車が収まるアパートの大家の家のガレージの前にはいつもと同じく鋼鉄の鎖が架かっていて、楕円形の太い輪が連なるその鎖に吸い寄せられるかのようにガレージの前で立ち止まつた彼は、鎖を手に取つて櫻のようすに左肩から幾重にも掛けた後、余つた鎖の端を自らの頭に巻き付けて冠を形作つた。そして最後に「ジ・エンド」とぽつりと呟くや、ゴミ袋を片手にその奇異な姿のまま鉄塔へと続く薄暗い夜道を一人ゆつくりと歩き始めた。菩薩の如き清らかな顔だ。

終